

# 心理コーディネーターになるために Vol.1

山下桂永子



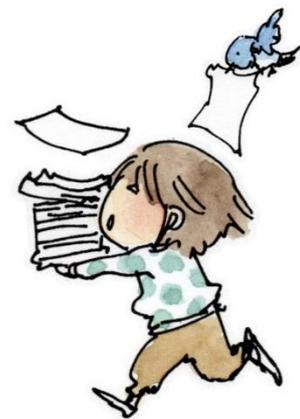
## ☆あるシンポジウムのお誘い

ひよんなことから2019年の9月、日本心理学会のシンポジウムに話題提供者として参加することになった。「ひよんなこと」と言ったら何らかの意図を持ってお声をかけてくださった先生に失礼にあたるかもしれない。訂正。ひよんなことではなく「思いがけず」、である。それまでの私にとって、学会のシンポジウムなんていうものは、見る聴くものであって、話す伝えるものではなかったし、何か目を引く論文を書いているとか、大学に籍をおいて研究を続けているとかでもない私には、あの演壇側に立つご縁はまずないだろう。そう思っていたので、オファーが来たときにはかなり驚いてしまった。

シンポジウムのテーマは「公認心理師になる～現場からの将来像～」というもの。オファーの内容は「医療、教育、産業、司法、福祉など5つの分野で仕事をしている人(現場で仕事をしている実務者)に1人ずつ話してもらおうというものですが、教育領域からの話題提供者として何か話していただくことはできませんか？あまり難しい話ではなく、公認心理師になってから現場で考えていること、現場で起こっていることをざっくばらんに喋っていただければ」というものであった。

## ☆やっではみたいが自信はない

思いがけないお誘いに少々パニックになったものの、オファーを受けるか受けないかでいえば、最初からやっではみたい気持ちはあった。私が、教育現場の公認心理師の実務者であるという風に誰かの目からみたら映るのだ、その話を聞きたい人がいるかもしれないのだ、ということは嬉しく光栄なことであったし、昔から目の前にぶら下げられた人参は食べてみてからおいしいか腐っているのか判断するタイプである(たいていはおいしくいただく)。受けるまでに少し時間を要したのは、ただただ自信がなく、恥をかきたくなかっただけである。



自信がない、というのは、教育現場でやっていることに自信がないということではない。「私って自分のこと、心理士(心理師)って言うていいのかしら？」ということである。いやまあ臨床心理士も公認心理師も資格は持っているから、心理士(心理師)じゃないかと言われれば心理士(心理師)ではある。それでもなかなか堂々と「(面倒なのでひらがなで統一します)しんりしです」と言えないままでいたこの10数年。それはなぜかと言えば、私自身が持つしんりしのイメージと、私が仕事でやっている、あるいはやっていきたいことがあまりマッチしていないような気がしていたからである。



### ☆食べるからには美味しくいただく

教育現場のしんりしと言って思い出される一般的なイメージはスクールカウンセラーが相談室で児童生徒と面談をしている姿ではないだろうか。しかし私はスクールカウンセラーとしての勤務は週に4時間ほどしかなく、あとの週4.5日は某市の教育委員会で教育相談というものを仕事にしている。その教育相談

では、面談もするが、面談以外の仕事はかなり多い。その面談以外の仕事は私にとってはやりがいのある、必要な仕事ではあるが、それを教育現場のしんりしの仕事だとか勝手に言うていいのだろうか？今の職場で私と同じような働き方(詳しくは追々お伝えするとして)をしている人はいないし、他でもあまり聞いたことがないからである。

そんな教育現場のしんりしとして活動しているという自負もない人間が公認心理師の将来像なんぞ語って大丈夫か？やりたいようにやって「これが私の思う公認心理師です！」とか個人的に言っている分にはいいかもしれないが、結構歴史ある学会のシンポジウムだぞ？そのマッチしていないイメージの違和感にある程度折り合いをつけておかなければ、きっとざっくばらんを通り越してしっちゃんめっちゃんかなことをしゃべってしまい(緊張や不安が高いと無駄に多弁になるタイプ)、偉い先生に罵られるか一笑に付されて大恥をかくに違いないぞ？そんな2時間地獄やぞ？

しかし。それでもこの人参は甘くておいしいのかもしれない。なんだったら人参に見えて人参じゃないのかもしれない。確かめたい。美味しくなければ次から食べない。そう思って食べることにした。

### ☆美味しかったシンポジウム

結果的にはとてもおいしく頂いた。このような機会を頂いたことは感謝しかない。シンポジウムの準備から発表に至るまでにいろいろな気づきや学びがあったし、他の話題提供者の方々のお話はとても刺激的で、2時間はあっという間に過ぎ去った。違う分野でありながら根底



に流れる思いは 5 人に共通していることにも感激した。もっともっと話題提供の方々のお話や指定討論者の先生や司会の先生のコメントを聞いたかったし、フロアーからの質疑には時間が足りず、議論する時間もなかったため、残念に思うほどであった。真偽のほどはわからないが、記憶の限りでは大恥をかくこともなかったように思う。

何よりの収穫は、教育現場の公認心理師について、あれこれとこねくり回しているうちに、それまでうすぼんやりとしていた自分の仕事の方向性の輪郭が見えてきたことである。シンポジウムの話者提供者としての肩書を英語で表記するとき、当初、私の肩書は「School Counselor」であった。それについて、前述の通り、自分の今やっていることとの違和感があることを司会の先生にお伝えしたところ、司会の先生から「Psychological Coordinator がいいかもしれない」というご意見を頂いた。それがとてもじんわりしっくりきた。学校のカウンセラーではなく、福祉分野のワーカーでもない立場で、子どもに関わる様々な事象や課題について、心理学的知見をもってコーディネートする。今の仕事の内容やこれから目指すべきことを言い当てているように感じた。



#### ☆心理コーディネーターになるために

私が今目指しているものは、教育分野における地域密着型の心理コーディネーターである。それがどういったものなのか、どうやって目指していくものなのかについては今後、お伝えしていきたい。今の職場に来て(たぶん)18年目。美味しかったシンポジウムの持ち時間15分では伝えきれなかった数々の失敗談を交えて記そうと思う。大恥かかないといいけれど。